

「想定外」という用語を含む委員会名称について

「想定外」豪雨による地盤災害への対応を考える調査研究委員会  
委員長 深川 良一

昨年 3 月 11 日に発生した東北太平洋沖地震に伴って、我々は歴史的にもまれな高さの津波を経験することになり、そのことが 2 万人近い犠牲者を出すことにつながった。さらに、この津波が福島原発災害を引き起こすことになったため、「想定外」あるいは「未曾有」という言葉は、責任ある立場の技術者、管理者が使用すると、場合によっては責任逃れともとられかねないイメージを与えることになった。

土木学会長・地盤工学会長・日本都市計画学会長は、平成 23 年 3 月 23 日に連名で「東北関東大震災－希望に向けて英知の結集を－」と題して、緊急声明を発表した。その中で、「今回の震災は、古今未曾有であり、想定外であると言われる。われわれが想定外という言葉を使うとき、専門家としての言い訳や弁解であってはならない。このような巨大地震に対しては、先人に習い、自然の脅威に畏れの念を持ち、ハード（防災施設）のみならずソフトも組み合わせた対応という視点が重要であることを、あらためて確認すべきである。」と述べている。

本委員会は、以上のことを深く自覚するものであるが、自戒の念も込めて、あえて「」付きでこの言葉を委員会名称の中にも含めることにした。なぜなら、東日本大震災のみならず、昨年の台風 12 号に伴う大土砂災害・河川災害のように、昨今、気象の激烈化の傾向が強まり、また東海、東南海、南海地震の連続的な発生が懸念されるなど、自然災害における安易な状況設定には問題があると考えからである。自然災害に対応しようと思えば、ある規模の災害を設定せざるをえないが、設計等ではあまりに巨大な規模の災害を仮定することは非現実的である。本委員会は、「想定外をなくすことはできない」という条件下で、地盤災害に対して何ができるのか、どこまでできるのか、技術者あるいは研究者としての自覚をもって現実的で実効性のある提案を行なっていく所存である。